

日本鉄鋼工学・技術教育史の連載にあたって

原 善 四 郎*

鉄鋼協会鉄鋼技術史委員会に設けられた鉄鋼教育史ワーキング・グループ(W.G)は、昭和49年7月25日の第1回委員会で、研究の目的、方法を確認していらい53年3月まで、資料の収集、検討を行い、以後各委員が分担時期について執筆を進めていたが、このほどその内容を本誌に12回にわたって逐次発表することとなつた。

教育史W.Gの研究目的は、幕末から現代にいたる我が国における鉄鋼工学、技術教育の実態と変遷を明らかにして、その中から今後の鉄鋼工学・技術教育のあり方に対して示唆を得ることであつた。その方法として、全時期を、1 鉄鋼教育の揺籃期、2 鉄鋼技術形成期、3 金属学発展期、4 鉄鋼生産規模拡大期、5 戦時体制期、6 戦後占領期、7 経済復興期、8 経済高度生長期に大別し、その各時期に設立された教育機関について諸資料を収集し、各時期における鉄鋼教育の意図と展開の様相を明らかにすることとした。その一助として先輩諸氏からこれらの点に関する体験をうかがうことも行つた。

時期の区分や各時期の資料検討の過程で、技術創造と工学教育・研究との関係、工学・技術の導入と国内で培われた学問・技術との関係、工学教育と生産労働との関係、工学者・技術者の社会的任務、戦後の鉄鋼技術の発

展と教育との関係などがとくに議論された。それらの議論の結果は、逐次発表されていく各委員の分担記述の中におのづから反映されるであろう。

全体の構成は次のように予定されている。()内に分担者の氏名を示した。1 近世における製鉄と冶金教育(中沢護人)、2 鉱業の近代化と高等教育の摸索、3 高等専門教育と鉱業技術教育、4 中・初等実業教育と鉱業技術教育、5 日本鉱業会の成立と日本鉄鋼協会の創立(以上佐々木享)、6 帝国大学における工業教育と鉄鋼界、7 金属学研究の発展と鉄鋼技術の近代化、8 鉄鋼生産の拡大と鉄鋼教育、9 戦時体制のなかで(以上、飯田賢一)、10 鉄鋼工学、技術教育の再建、11 鉄鋼業の飛躍と鉄鋼教育(以上、黒岩俊郎)、12 現代世界と鉄鋼教育(原善四郎)

現代日本の工業技術、とくに鉄鋼技術の飛躍的進歩が何によつたか。これは南北格差の解消が地球的課題のひとつになつていくとき、発展途上諸国からも注目されている問題である。今後の鉄鋼業、鉄鋼技術はいかにあるべきかについて人類生存のあり方と関連してあやまちない方向を構想し、実践する鉄鋼工学・技術者はいかにして教育されるか。鉄鋼教育史の研究はこれらの課題にもこたえねばならない。この連載がこれらの問題に対して本誌読者が議論をおこす契機となることを期待する。

* 本会 鉄鋼科学・技術史委員会 鉄鋼教育史W.G. 主査
東京大学生産技術研究所教授

技術トピックス

~~~~~

## 幕末における製鉄と冶金教育

——日本鉄鋼工学・技術教育史(1)——

中 沢 護 人\*

### Ironmaking and Metallurgical Education in the Later Tokugawa Regime

Morito NAKAZAWA

#### 1. ヨーロッパとの格差

幕末から明治にかけて、日本は欧米から近代製鉄技術

とその教育制度を学んで近代化をなしとげた。それでも、欧米の当時の状況を概観することから始めよう。ヨーロッパでは19世紀になると、前世紀にイギリスで発

昭和56年10月5日受付(Received Oct. 5, 1981) (依頼技術トピックス)

\* 製鉄技術史研究者